

設計チーム体制とその特徴

設計を進めるうえで重要と考える価値観

01 真鶴ならではの教育活動を支える義務教育学校づくりへの眼差し

・基本構想・基本計画の成果はもちろん、これまでの真鶴町の皆さんが熟議された検討プロセスの成果を最大限に尊重します。

・『教育に人づくり、人づくりにまちづくり、まちの未来づくり』学校づくりに近道はありません。大切にしたい4つの価値感を皆で共有し、関係者一同ワンチームでプロジェクトを推進します。

【設計を進めるうえで大切にしたい4つの価値観】

子どもの教育活動を支える義務教育学校をしっかりとくる

活動や教育から一緒に考え利用者と協働して学校をつくる

地域と学校が共にあることを最大限生かしてつくる

学校も含めたまち全体で皆で子どもたちを育てる

02 対話を重視したスムーズでスピーディーな業務推進

・学校関係者や地域、担当部署との綿密な対話を重ね、共に歩み共につくことを重視し、相互理解を得ながら手戻りがないように業務を推進します。

・専門分野が多岐にわたるため、組織の指示系統を明確にし、担当者各々が責任を持って業務に取り組みます。

・設計プロセスでは評価軸を吟味した充分な比較検討を行い、解決策を先行提案していく姿勢を徹底します。

・計画案は様々な角度から検討し、選択可能な複数案を提示し、関係者との協議／合意の下で業務を推進します。

・BIM（三次元モデル）や模式図、比較表、模型など視覚的にわかりやすい資料を用いたわかりやすいプレゼンを心掛け、スピーディーな合意形成をサポートします。

・建物規模や構造、設備が確定した後ではコストの調整代が小さくなるため、基本設計初期から複数段階でコスト検証し、確実なコストコントロールを行います。



業務期間中、発注者と共に歩む「パートナー」としてのあり方

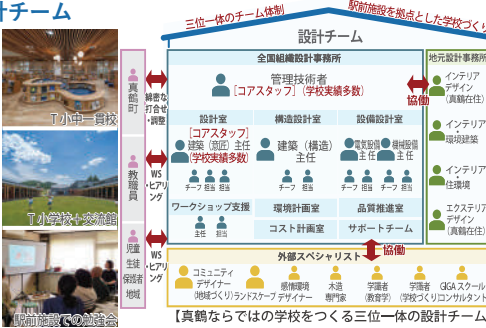
03 真鶴ならではの学校づくりを実現する頼れる設計チーム

・組織設計事務所の総合力とコーディネート力を生かし、豊富な教育文化施設、小中一貫校、合築、利用者協働の実績を持つメンバーで設計チームを構成します。

・地元設計事務所の地域理解力とデザイン力を結集し、地域に根差した確かな設計を行います。

・コミュニティデザインやランドスケープ、感情環境デザインなど、各分野のスペシャリストを設計チームに加え、三位一体の体制で設計に臨みます。

・すでに地元設計事務所が拠点としている駅前施設を活用し、今回の学校づくりのための地域に開いた拠点とします。設計時から竣工後まで「ずっと頼りやすい」町医者のようなサポート体制を整えます。



品質管理・コスト管理方法について

業務品質管理

04 豊富な実績と全社一丸体制による品質確保

・数多くの学校建築の実績を生かし、各フェーズにおける勘所を押さえ手戻りのない業務推進を行います。

・品質推進室によるDR（デザインレビュー）や査図をステップ毎に実施し、高い設計品質を確保します。（09参照）

・ISOマニュアルに基づき、設計から施工後の不具合や苦情とその解決策を記録したフィードバックシート（FB）を活用し、保つべき品質を確保します。

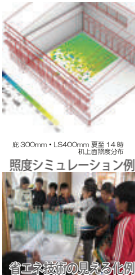
06 適切なランニングコストの実現 合理的なランニングコスト削減手法

・長時間過ごす普通教室や職員室は南側採光とし、照明エネルギーを削減します。

・躯体や窓の高断熱化により、建物の環境性能をアップし、快適な温熱環境をつくりながら、空調エネルギーを削減します。

・計画敷地の卓越風をつかむ建物配置、建物形態により冷房エネルギーを削減します。

・省エネ技術の見える化により、児童生徒が自ら考え行動するきっかけをつくり、更なる省エネ効果を生成します。

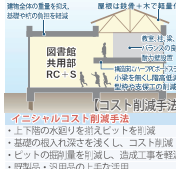


予算と品質に応じたイニシャルコスト管理

05 効果的なイニシャルコスト削減手法

・耐力壁をバランスよく配置し、平面計画と構造計画の整合を図ることで、余計なコスト増を防ぎます。

・適材適所に構造形式を選択し、ハイブリッドさせることで、資材価格変動の影響を受けにくく、入札不調のリスクを軽減します。



容易な保守メンテナンスの実現

07 確実にメンテナンス性を高める手法

・塩害対策も兼ねて、外壁や屋根の外断熱化を行い、躯体を保護することで、長寿命化を図ります。

・建物外周部ににはデッキを設置、不具合の早期発見につなげます。

・年間降水量の多い真鶴の気候を考慮し、勾配屋根で適切に雨を排水し、漏水を防ぎます。

・校舎を教材としたメンテナンスの仕組みづくりを行います。



全体スケジュール・設計の取組方針について

本業務におけるミッション

08 真鶴ならではの『学び合い・育ち合いの場』の実現

・本業務では幼保も含めた児童生徒と地域が共に学び合い育ち合う場づくりが最大のミッションだと考えます。

・ミッションを遂行するための8つの提案を具現化することで、地域が共にあることを最大限生かした義務教育学校をまち総ぐるみでつくります。

09 設計案の話し合いへの活かし方と議論テーマのゆるやかな移行

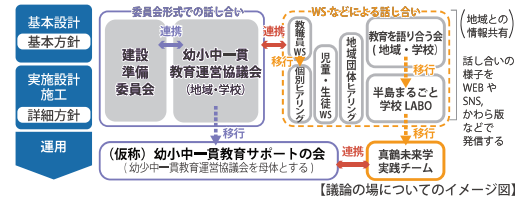
09-1 主体性を育み運用へつなげる議論の場を提案

・新しい学びや交流の実現、竣工後のスムーズな運用へとつなぐためには、設計段階においても施設利用者、関係者の意識を高め、主体性を育むことが大切です。

・すでに熟議を重ねている「建設準備委員会」の場や、各種ワークショップ（以下、WS）を通じて、様々な主体と議論を重ね、意見をとり入れることが効率的かつ効果的な協働プロセスになると考えます。

真鶴ならではの『学び合い・育ち合いの場』を実現するための8つの提案

- 義務教育学校4-3-2制を生かした学校づくり
- 地域が共にあり身近にすることを最大限生かした開かれた施設づくり
- 誰もが当事者意識を醸成できる利用者協働型プロセスの施設づくり
- 地球に優しい持続可能な環境学習型エコスクール
- 利用者の過ごしやすさと働きやすさに配慮した最先端の環境づくり
- 様々な心身状態に配慮したインクルーシブな環境づくり
- 日常はもちろん、非常時も安心/安全な施設づくり
- 美の基準を生かした真鶴ならではの風景を牽引する学びがゆきり

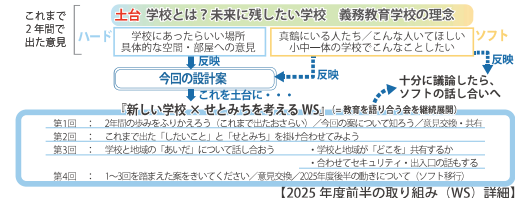


09-2 これまで2年間の話し合いで出た意見を生かして進めるワークショップ

・十分議論されてきたことが設計段階で再び問いかねられることのないよう、これまで出た意見をしっかりと整理し、次の議論へとつなげます。

・まずは設計案を土台に2年間の積み重ねと設計者のアイデアを丁寧に紡いで確認し合うワークを実施します。

・そこから徐々に、「設計案があるからこそより具体的に検討できる内容（地域と学校の共有エリア、セキュリティなど）」へとワークのテーマを移行させます。

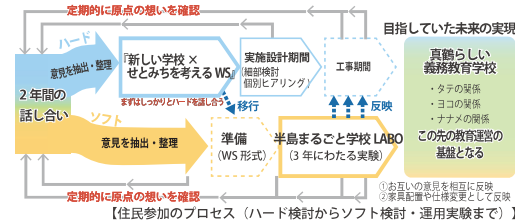


09-3 まちぐるみの話し合いをハードからソフトのテーマへも広げていくプロセスの提案

・多くの町民や関係者が一緒になって話し合う会議（教育を語り合う会）の存在は非常に重要なため、引き続き開催を継続します。今年度はまず、全員の関心が高い「設計案」に関わるテーマの話し合いから始めます。

・その後26年夏の中学校移転に向けたソフトの取組みについて話し合う場へとゆるやかに移行させます。（詳細09-2参照）

・開校までのあいだ、年に2回のペースで、進捗報告を兼ねた町民全体が参加できる機会（教育を語り合う会）を継続していきます。



【関係者の意見や提案を確実に設計に反映させるためのプロセス】

真鶴町がめざす新しい学校施設の在り方/地域づくり、支える学校づくりの在り方

『いえ』と『せとみち』のかけ合わせでつくる 真鶴ならではの半島まるごと義務教育学校づくり

真鶴町の特徴は、家ででの生活が背戸道にしみ出し、豊かな植生とのふれあい、起伏やくねりが生み出す人だまり、地場の材料の手触りなどの体験を通して、人・自然・歴史文化との出会いや交流が生まれているところです。

この町の特徴に教育的効果を見出し、学びと生活の中心となる場を「いえ」、出会いと交流を共創する場を「せとみち」と見立て、いえとせとみちの関係が学校の中、さらには外でもつながり合い、『まち全体が学びのフィールド』となる真鶴ならではの新しい学校施設をつくります。

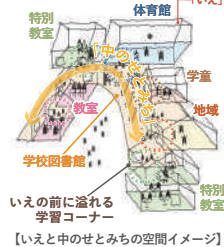


学びの「いえ」が広がり、出会いの「せとみち」が繋がる
いえとせとみちでつくるインクルーシブな環境

01 児童生徒の学びと成長を促す環境づくり

01-1 「いえ」と「中のせとみち」をつなげてつくる学校づくり

- ・教室のまとまりを「いえ」、いえといえを結び共用部を「中のせとみち」とし、いえとみちがつながり合うことで、児童生徒の個別最適な学びと協働的な学びを両立させる環境を実現します。
- ・いえと中のせとみちの間には学習コーナーを設け、学校図書館と連動させることで、児童生徒の学びの機会を校舎全体へと展開させます。
- ・いえまでの道のりを楽しみながら、たくさんの人やモノ、コトに触れ、学び合いや育ち合いがおこる環境をつくります。



【いえと中のせとみちの空間イメージ】

01-2 学年を超えたつながりを生む空間づくり

- ・9年間という長い学校生活の中では、学びや交流の停滞や空間体験のマンネリ化、人間関係の固定化がおこらない工夫が大切です。
- ・4-3-2制の学年の区切りに合わせていえのまとまりをつくることで、児童生徒の安心感や帰属意識、リーダー意識の醸成を促します。
- ・いえの設えには空間の気積や内装に変化をつけ、9年間の成長を感じられる空間をつくります。
- ・学習コーナーでは、上級生へのあこがれを感じる展示や、おしゃべりできる居場所などを設け、異学年の交流を促進します。



【子どもたちの交流の様子】

01-3 美の基準を体現した愛着を育む学校づくり

- ・一日の大半を過ごす学校生活の中で、真鶴の歴史文化を感じられる環境を日々体感できることは教育上大切だと考えます。
- ・美の基準をモチーフにした景観を、まちの材料で皆と一緒につくることで、校舎そのものが教材となり、校舎やまちへの愛着を育みます。
- ・敷地周辺の山並みや、家同士がひしめき合う屋根並みに呼応した外観デザインとします。駅ホームに降り立った時に訪れたい戻りたいと感じる景観をつくります。



【真鶴のひしめき合う屋根並み風景】



計画敷地には、まちから正門、そして校舎へとつながる道
校舎を抱く背後の山といった景観のシーケンスがあることが特徴です
外のせとみち、雁行した壁面、2階建ての低層ボリューム
重なり合う屋根並みで再構成し、真鶴のまちに馴染む新たな景観をつくります

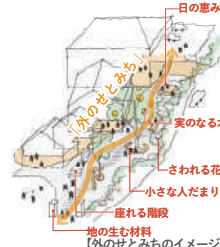
【東からみた「外のせとみち」のイメージ】

平常時、及び非常時における学校施設の安全性

02 学校と地域の日常的な交流を促す環境づくり

02-1 「外のせとみち」でつくる出会いと交流の場づくり

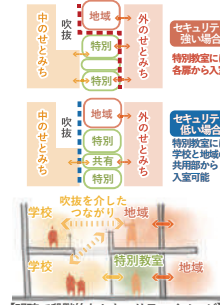
- ・共創を促す新しい学校施設には、町民誰もが気軽にふらっと立ち寄りやすい、まちに対して開かれた構えが大切だと考えます。
- ・正門から体育館までをつなぐ敷地内の遊歩道『外のせとみち』は、豊かな植生、地域産素材の舗装やベンチ、交差点の人だまりなどで構成し、自然や文化、人とのふれあいを育む場となります。
- ・外のせとみちで重ねた地域との多様な経験は、成長と共にまちへと生活圏を広げ、社会性や創造性を身に付けるきっかけづくりとなります。



【外のせとみちのイメージ】

02-2 地域とのつながりを無理なくつくる空間づくり

- ・休日はもちろん、放課後や日中に学校と地域が空間をシェアするためには、明確でわかりやすいセキュリティ区画の設定が不可欠です。
- ・地域開放を想定したエリアには、外のせとみちから直接アプローチできる入口を設け、利用動線を明確化することで、学校運用時間帯でも教室のシェアが可能です。
- ・学校と地域のエリアの境界には吹抜けを設けることで、地域との交流を促す「見る・見られる関係」をつくり、ゆるやかに領域を分けながらもつながる空間とします。



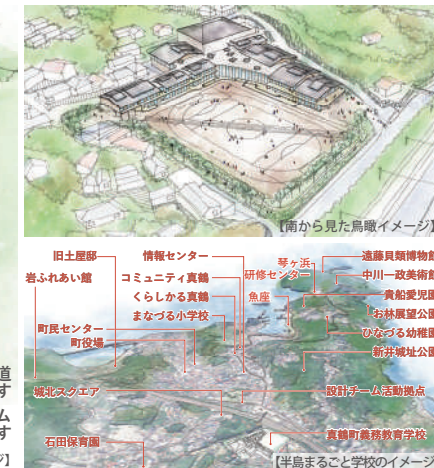
【明確で段階的なセキュリティイメージ】

02-3 まち全体とのつながりを生む体験・対話・発信のサイクルづくり

- ・真鶴にすでにある豊富な資源や文化、人材を生かしたリアルな体験は、未来をつくる新たな教育活動のきっかけです。
- ・まちでの体験を学校に持ち帰り、児童生徒同士や町民との対話、成果物の発信を行う拠点となるネットワークづくりを行います。
- ・意図的かつ計画的に、体験活動の機会を増やし、地域との連携や学びを通じて、非認知能力の形成や自己肯定感、自己有用感を高める機会をつくります。



【真鶴でのリアルな体験の様子】



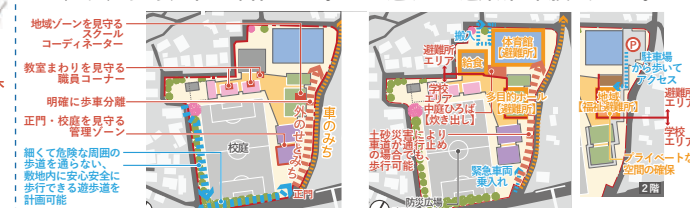
【南から見た鳥瞰イメージ】



【半島まるごと学校のイメージ】

03 平常時から非常時まで見据えた安全安心の環境づくり

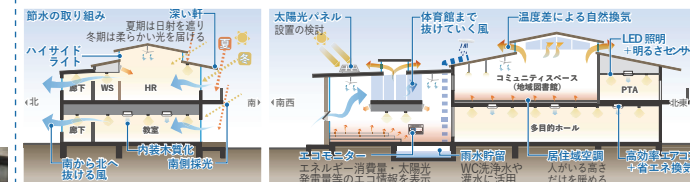
- ・学校周辺も含めた歩車分離を徹底し、各所に見守りスポットを設けることで、平常時の安全性を確保します。
- ・避難所エリアを北側に集約することで、非常時に学校エリアと明確に分離でき、速やかに避難所へ転換可能です。



地球環境に配慮した学校施設づくりの在り方

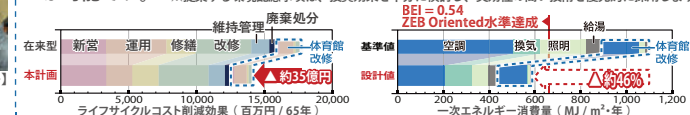
04 真鶴の自然を生かした児童生徒や地球にとって優しい環境づくり

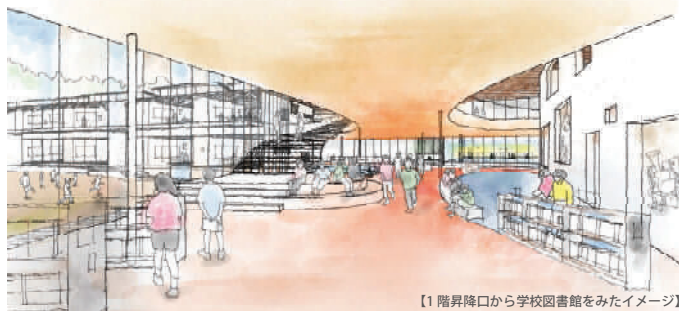
- ・年間を通じて温暖で日較差が小さい気候特性に配慮し、屋根/外壁/窓の高温熱化により、省エネで快適な温熱環境をつくれます。
- ・L型で雁行した平面形状、南西から吹く卓越風を生かした窓配置により、校舎内に快適な風を届けます。
- ・既存の学校体育館は機能改善及び空調改修に加え、カバー工法による屋根・窓の断熱化と外壁の高温熱化とすることで、運営しながら長寿命化改修を行います。



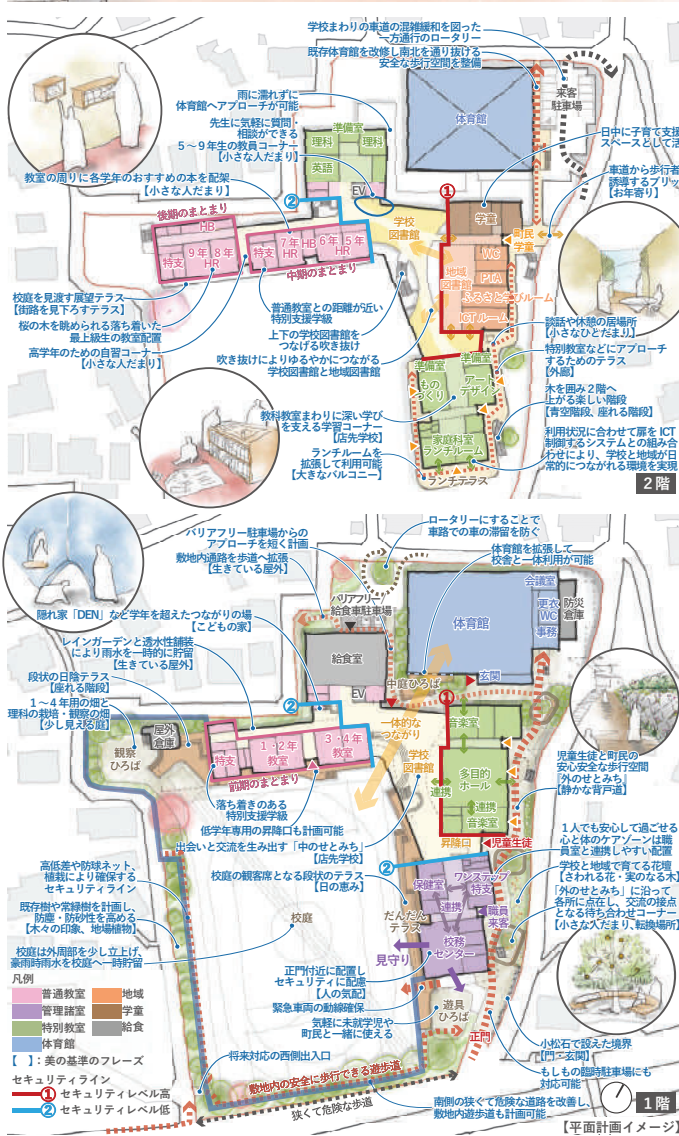
- ・上記の技術を採用することで、一次エネルギー消費量46%削減し、ZEB Oriented水準を実現します。校舎単体では51%削減し、ZEB Readyの実現が可能です。

※提案する環境配慮事項は、投資効果を十分に検討し、実効性の高い技術を優先的に採用します





【1階昇降口から学校図書館をみたイメージ】



新校舎・校庭・図書館等の配置の考え方

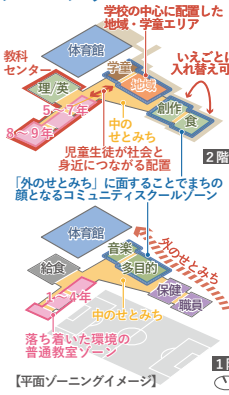
01 比較検討により導かれた最適案『L型ハイブリッド配置』

- 様々な観点から比較検討を行った結果、地域と共にある義務教育学校としてのメリットを最大限発揮できる『L型ハイブリッド配置』を提案します。
- L型ハイブリッド配置により、平面的な広がりを生かした機能的で明快なゾーニング、またより毎の落ち着いた環境、L型の結節点に学びと交流の中心となる学校図書館を設けた大らかでつながりのある空間構成が可能です。

	北側配置	東側配置	L型ハイブリッド配置
私たちの提案は、 L型ハイブリッド配置です。			
正門から校舎への動線	昇降口まで距離が遠い	昇降口が近く見守りやすい	昇降口が近く見守りやすい
校庭の環境	十分な大きさを確保する動線が確保できない	十分な大きさを確保する動線が確保できる	十分な大きさを確保する動線が確保できる
校舎内動線	コンパクトな動線が確保できる	コンパクトな動線が確保できる	コンパクトな動線が確保できる
日照環境への配慮	普通教室南向き	普通教室南向き	普通教室南向き
卓越風の利用	海からの卓越風を取り込む	海からの卓越風が取り込みにくい	多方向から取り込む
アリーナとの連携	多様な関わりがつけられる	多様な関わりがつけられる	多様な関わりがつけられる
近隣の配慮	砂ぼこり対策がしやすい	砂ぼこりへの対策が難しい	砂ぼこり対策がしやすい
広場の多様さ	2か所	2か所	3か所
地域開放のしやすさ	正門から昇降口の動線と校庭の環境確保に課題が残る	正門から昇降口の動線と校庭の環境確保に課題が残る	L型を生かした平面的な広がりを中心とする空間が計画できる
総合評価			

03 『L型配置』を生かした機能的で明快なゾーニング

- 東側の「外のせとみち」に面してまちの顔となるコミュニティスクールゾーンを配置し、北側の落ち着いたエリアには普通教室ゾーンを配置します。
- 学年の区切りに合わせて、1～4年生（前期）は接地性の高い1階に配置し、5～9年生（中・後期）は教科教室や地域に近い2階に配置します。
- 地域・児童エリアは学校の中心に配置し、児童生徒が社会と身近につながる環境をつくります。
- 専門性の高い特別教室エリアは2階を中心に配置し、STEAM教育の領域毎に分類し分散配置することで、学校全体が学びのフィールドとなります。
- 関連のある諸室を「いえ」の単位でまとめているため、設計プロセスの中で柔軟に入れ替え可能です。
- セキュリティラインを明確に複数設けることで、多段階な開放が可能です。



周辺環境・近隣の配慮事項

05 良好な関係を築く近隣への環境配慮

- 3階建ての既存校舎を2階建てにすることで、近隣への日当たりや風通しを改善します。
- 音の出る教室や空間は近隣住宅側への配置を避け、日中の騒音を防ぎます。
- 敷地境界に植栽帯を設けることで、卓越風や海から吹く風による近隣への砂ぼこりを防ぎます。また、豊かな緑により心地よい涼風を届けます。

新校舎完成後の地域との連携について

07 「半島まるごと学校」の実現を目指した「ラボ」を推進

- 開校までの期間約3年半、小学校と中学生が同じ校舎で一緒に過ごすことを生かし、まち全体が学び場化プロジェクト「半島まるごと学校LABO(以下ラボ)」に取り組み、地域との関わりを育みます。
- ラボはAARサイクルを取り入れ、1年単位で展開します。（前期：5月～7月、後期：10月～12月）また、ラボでの実践はまなづる未来学の授業内容へもつながります。



02 安全安心な動線計画と交流を生み出す外構計画の両立

- 車移動が多い土地柄に配慮し、歩行者専用の遊歩道「外のせとみち」を敷地内に設け、児童生徒だけでなく、近隣の安心安全を確保します。
- 体育館の2階駐車場と校舎北側の地上駐車場の2か所にロータリーを設け、送迎時の混雑を防ぎます。両方のバリアフリー駐車場からは、段差なしで校舎へアクセス可能です。
- 学校の顔となるアプローチ空間には、ゆったりとした広場を設け、児童生徒を迎え入れます。
- 外のせとみちには、地域と一緒に育てる花壇やベンチを点在させ、児童生徒と町民が気軽に交流でき、顔なじみの関係をつくります。
- 結節点や端部に小さな人だまりとなる広場を配置し、出会いと交流の場を演出します。
- 既存の樹木や地場の植物を機能に合わせて効果的に配置し、登下校を華やかに彩ります。
- 一時的に雨水を貯留できる植栽帯や、透水性舗装とすることで、豪雨にも対応します。



04 新しい世界へつながる 学校図書館×地域図書館

- 「いえ」から「いえ」へとまち歩きを楽しむように、中央の学校図書館から興味や関心の連鎖が起こる『学校まるごと図書館』を計画します。
- コミュニティスペースには、絵本から一般書までを配架し、未就学児から大人まで本に親しめる地域図書館としての役割を提案します。
- 学校図書館と地域図書館は、吹抜けを介してゆるやかにつなげます。日中は互いの活動を垣間見ることができ、放課後や休日は一体的な運用も可能です。
- 図書館全体に読書/学習コーナーを点在させ、目的や気分に合わせて居場所を選択できる計画とします。特別教室と準備室の周りに、作品や器具/工具を展示し、興味・関心の入口を設けることで、学校全体で学びをシェアできます。



建設工事期間の安全管理、学校運営上への配慮事項

06 利用者の安全に最大限配慮した工事計画

- 工事車両出入口は敷地内の後退した位置に設け、工事車両の進入をスムーズにし、車両動線と利用者動線との交錯が無い動線とします。
- 長期間の建て替え工事となるため、防音パネルにより近隣住宅への防音や飛散防止を徹底します。
- 右図の工事中の配慮事項を十分に満たし、近隣の配慮と安全確保を行います。



実験に適した環境	「まるごと」実験スケジュール	ラボで実験を重ねるチーム（案）
R7.12～R8.6 プロジェクトの骨子決め アイデア検討のWS	準備期間	町民みんなが先生チーム
R8.7/8 中学校引越し		卒業生との交流を考えるチーム
R8.10-12 プレラボ		〇〇君の学びたいこと実現チーム
R9.5-7/10-12 ラボ第1期	実験期間	場の手借りようチーム
R10.5-7/10-12 ラボ第2期		いろんな職業知ってもらうチーム
R11.5-7/10-12 ラボ第3期		町を調べようチーム
R12.4 開校	通用	

このプロセスを通じて、児童生徒と町民が学び合い育ち合う関係が構築された状態で、新校舎完成を迎えることを目指します

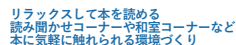
まなづる未来学



・新学習指導要領では「主体的/対話的で深い学び」の視点から、「何を学ぶか」だけではなく「どのように学ぶか」を重視しています。「学びに向かう力・人間性」「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」をバランスよく育むことのできる場として学校図書館は重要な場と考えます。

- ・興味や関心が湧く図書コーナーなど、本に関わるコーナーを点をさせてつなぐことで、児童生徒をはじめとした利用者の学びの深化、課題の発見、本を介した人の交流が起こる場をつくります。

- ・主要な動線に沿って配置する書架レイアウトを工夫することで、児童生徒の好奇心をかきたて、本や人との交流のあり方を多様に演出します。

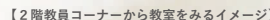


リラックスして本を読める
読み聞かせコーナーや和室コーナーなど
本に気軽に触れられる環境づくり



【読み聞かせコーナー例】

9年間の義務教育学校の学習環境づくり。



・学校生活の拠点となる教室廻りのスペースについては、大半の授業が教室で行われる1～2年生、ペアやグループ学習の機会が増え多様な学習形態の変化が起こりやすい3～6年生、教科センター方式となる7～9年生の3つのカテゴリーに分け、学習内容の違いや成長段階に合わせた設えとします。

- ・各階の教室エリアに面して、発信コーナーや和室コーナーなどを設けることで、休み時間や移動教室の合間での日常的な異学年交流を促進します。



【内包型ワークスペースの事例】

3～6年生の教室 WSの建具を開放してCRと一体的に利用可能な〈教室+拡張型ワークスペース〉



【拡張型ワークスペースの事例】

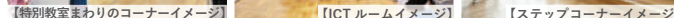
7～9年生の教室 身体の成長やICT学習の変化に対応し広々とした〈教科専門教室+ホームページ〉



【8～9年生の教室まわりイメージ】

- ・「主体的／対話的で深い学び」の実現に向け、学習活動に求められる環境は多種多様に変化しています。ICT教育や外国語教育への対応も必須です。
- ・空間の大小、机やイスの有無など、多様な集団学習スペースを設け、通常授業や異学年合同の活動など、活動に合わせて空間を選択できるように計画します。

- 授業に応じて分節可能な移動間仕切り
個別学習に適する構成
- プロジェクターや大きなホワイトボード
クラス発表などに適する構成
- 立体的で正面性のある階段状のスペース
合同発表会などに適する構成



インクルーシブな教育環境づくり-

- 障がいのある子どもとない子どもが触れ合うことで、相互理解を促し、主体的な選択や自己決定する態度や能力を育む調和的発達を促す環境を目指します。

- ・特別支援教室は障がいに合わせて分散配置します。教室内は、静的/中間/動的な領域を、段階的に連続的に配置した設えとします。



- ・心のケアが必要な児童生徒が増加する学校において、理性ではなく感情にアプローチする環境デザインによって、心が動きにくい人の自発的な行動を引き出し、心の土台をつくります。

- ・あらゆる心身状態であっても「楽しそう」という気持ちを引き出すデザインとして、色や家具、コーナー、外部刺激の調整等にも配慮し、学びに結びつきやすい環境をつくります。

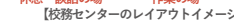


【感情環境デザインの事例】

職員の働きやすい環境づくり

- ・校務センターは、教職員のウェルビーイングをかなえつつ、個別最適な活動と協働的活動が実現する場を計画します。

- ・前期/中期/後期課程の教員同士の連携を図りやすくするため、共有する印刷スペースと休憩・打合せスペースを集約し、中央に配置します。
- ・普通教室廻りの教員の居場所として教員コーナーを設け、教員の作業場を充実させます。



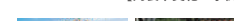
木造・木質化、地域産建材の利用について。

- ・2階建て準耐火建築物とすることで、屋根を一部木造化(燃えしろ設計)することが可能です。

- ・屋根架構には規格製材を利用し、適度な木材使用量とすることで、木材調達のリスクや部材の製材コストを抑えます。
- ・主体構造は鉄筋コンクリート(RC)造とし、平面計画の自由度、耐火安全性、高い耐久性や耐震性、下階への振動・騒音抑制に配慮します。

- ・木質空間は安定した温熱環境をつくるだけでなく、調湿効果により、夏の高温化と冬の乾燥を防止し、インフルエンザ罹患率の低減など、健康に寄与します。

- ・床／壁／天井／建具／家具／サインなど、徹底した内装木質化により、木の温もりに包まれた環境をつくります。室内の明るさと機能性のバランスを意識した計画とします。



・ 貴船まつりの船や山車の装飾に使われる花飾りや、鹿島踊りの黄金柄杓に見られる傘状の構造をモチーフとし、子どもの健やかな成長を祈る、真鶴の伝統文化を引き継いだデザインとします。

- ・真鶴の基幹産業である石材業・漁業・農業に関連する地域産建材を用いて、町民みんなでつくり、使うことで、学校や町への愛着を醸成します。

